

第一編
原

始

凡 例

一 本編は考古学で扱う遺跡と遺物について紹介する。中・近世については資料に乏しいため、平安時代までの遺跡・遺物を対象とした。

一 掲載した遺跡は表面採集等で分布を確認したものを基本としているが、神奈川県史の調査以後破壊されて確認できない遺跡や、遺物が散失して内容が確認できない遺跡も、当町内の遺跡数が少ないためあえて取り上げた。

一 遺跡および遺物の紹介にあたり、すでに学術的報告書の公開されている場合は、すべてその報告書に準拠した。実測図版なども未報告資料については新たに作成したが、大半はそのまま転載した。

一 収録した遺跡は、町内を岩・真鶴の二地区に分け、地区ごとに一括した。

一 遺物あるいは記録の収録にあたり左記の機関および個人の協力を得た。明記して謝意を表したい。

神奈川県立埋蔵文化財センター 神奈川県立文化資料館
湯河原観光会館

故赤星直忠 杉山博久 平井敏正 松本敬

一 文中の人名に関しては、原則として敬称・敬語は省略した。

一 文中の年号は西暦を用い、()内に日本暦を併記した。

一 各遺跡ごとに関係する文献のある場合には可能な限り参考文献を提示した。

一 実測挿図中の縮尺は縄文時代の完形品は六分の一、他の土器は四分の一、および石器は四分の一を原則としているが、すべての遺物についてではない。適宜、図版縮尺を参考とされたい。

一 遺跡位置図は、その遺跡の中心と考えられる地点に○印で示した。また、縮尺は一万分の一である。



遺 跡 分 布

- 6 番場浦遺跡 8 狐塚古墳群



真鶴町内

图中番号

- | | | | |
|---------|---------|--------|--------|
| 1 沢尻遺跡 | 2 上野遺跡 | 3 平台遺跡 | 4 謡坂遺跡 |
| 5 平台古墳群 | 7 釈迦堂遺跡 | 9 荒井城址 | |

解 説

真鶴町の遺跡は、山がちな地形上の制約から半島付け根に位置する比較的平坦な地域に多く分布している。現在は住宅が密集しており、規模がわかる遺跡は少ない。他地域の遺跡は小山の頂上や緩斜面に分布する。

遺跡の築かれた時代は、縄文時代早期から古墳時代後期までと長い、すべての時期に遺跡が存在したわけではない。発掘などの調査によって様相が明らかかな縄文時代中期の釈迦堂遺跡と、古墳時代後期の狐塚・平台古墳群は町を代表する遺跡である。

資料 目次

第一章 岩 地区

1	沢尻遺跡	7
2	上野遺跡	8
3	平台遺跡	9

第二章 真鶴地区

4	謡坂遺跡	10
5	平台古墳群	11
	〔図版1〕 沢尻遺跡出土の石器	14
	〔図版2〕 平台古墳群出土の遺物	15
6	番場浦遺跡	16
7	釈迦堂遺跡	17
	〔図版3〕 釈迦堂遺跡出土の土器	22
	〔図版4〕 釈迦堂遺跡出土の土器拓影図(1)	23
	〔図版5〕 釈迦堂遺跡出土の土器拓影図(2)	24
	〔図版6〕 釈迦堂遺跡出土の石器(1)	25
	〔図版7〕 釈迦堂遺跡出土の石器(2)	26
8	狐塚古墳群	27
	〔図版8〕 狐塚古墳群出土の土器	32
9	荒井城址	33



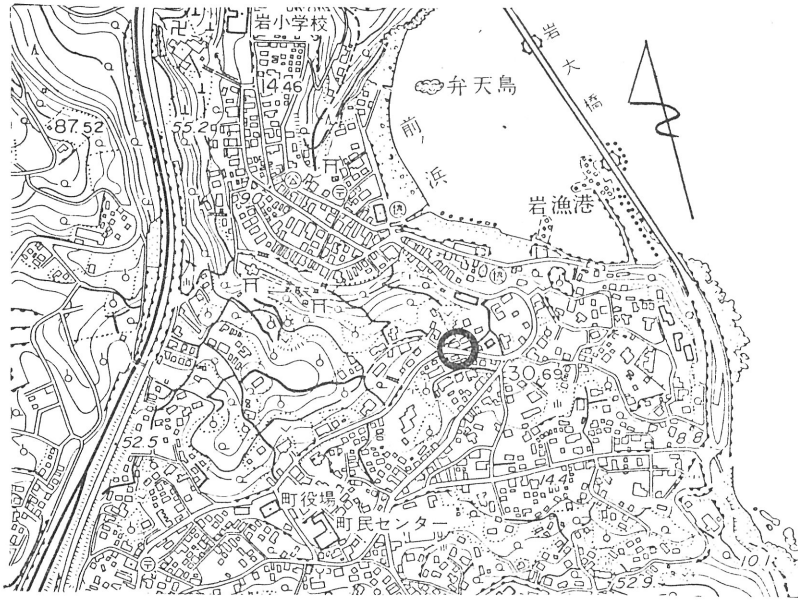
第一章 岩地区

1 沢尻遺跡

位置 岩字沢尻

箱根外輪山から延びた尾根は新島海岸で比高二〇呎の断崖をなして終わる。尾根の西側には岩沢川が流れ真鶴半島の丘陵とを分ける。新島海岸付近では、尾根は小山から急斜面をへて、最後に平坦面を形成して海にいたる。尾根の両側の沢では所々に湧水がある。この尾根は、いたるところミカンが栽培されている。小山の頂上には竹林が一部残る。遺跡は、尾根の小高い頂上部（一〇〇呎）と一〇〇呎離れた海に面した平坦地（七五呎）に立地している。土地所有者が開墾中に採集した土器片は神奈川県史編さん時の調査で、縄文時代前期の諸磯C式に属すると確認されているが、現在は散失。その後、磨石（図版1）も採集されている。

遺物保管者 松本敬 磨石 一点



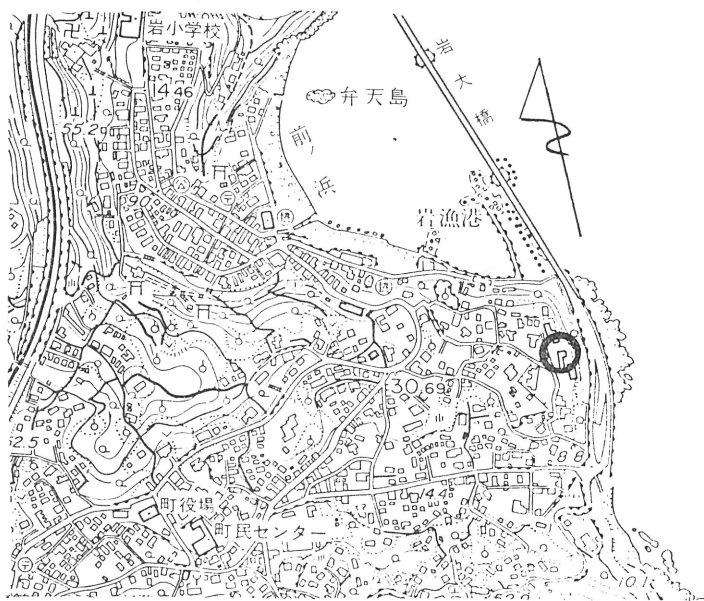
2 上野遺跡

位置 岩字上野

真鶴駅の北側を東に延びる丘陵は先端部で高低差一〇
 ㊦の急斜面をなして海にいたる。丘陵の北斜面は東に開
 く小さな入り江（岩漁港）の南辺を形成している。

遺跡は、この丘陵の先端付近の南向き緩斜面に立地
 し、海拔三五㊦を測る。真鶴駅から岩漁港に向かう町道
 の謡坂にかかる直前両側に占地する。付近には町役場も
 あり住宅が立ち並び、遺跡の確認は難しいが、残り少な
 い家庭菜園では土器小片が採集された。県史では縄文時
 代後期の堀之内式土器片と石匙・打製石斧の出土を認め
 ている。

遺物保管者 湯河原観光会館 土器 数片、石匙 一
 点



3 平台遺跡

位置 岩字平台

横浜国立大学教育学部附属理科教育実習施設内に所在する。上野遺跡のある丘陵の先端の平坦面に立地し、海抜一〇呎を測る。実習施設建設に際し、構内各所に土器が散在していたのを満留武知が採集保管した。現在、採集された土器破片は散失している。一九六二（昭和三十一年）年の赤星直忠の調査によれば、縄文時代前期の諸磯式を主とし、他に後期の加曽利B式、弥生土器・土師器・須恵器がわずかに混在しているという。他に滑石製小円板・磨製石斧・石錘・石匙が出土している。



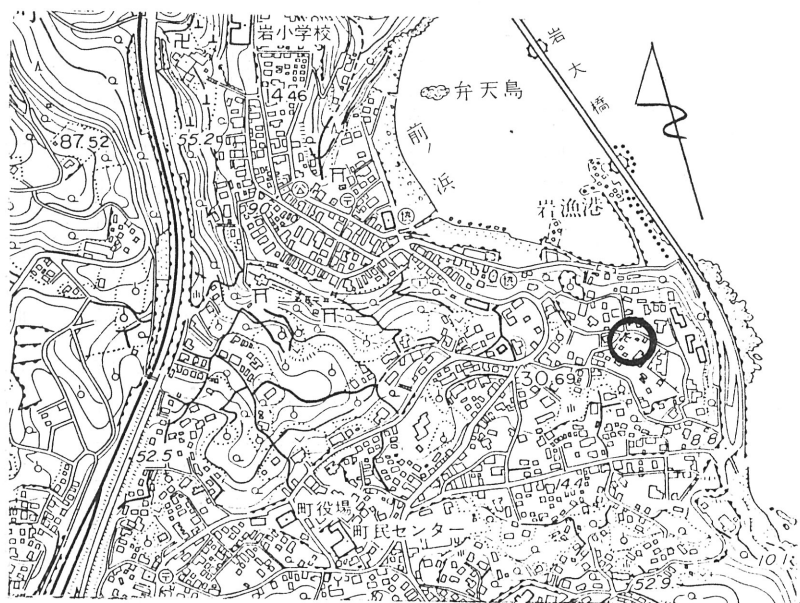
4 謡坂遺跡

位置 岩字謡坂

上野遺跡と平台遺跡の中間にあたる。真鶴駅から岩漁港に向かう町道が、尾根を下りて海に向かう坂を謡坂という。遺跡は、謡坂が岩漁港方面に大きく屈曲する付近の道の海側に占地する。岩漁業協同組合の裏手の畑地である。遺跡は海に面した緩斜面にあり、海拔一〇呎ほどである。縄文時代中期（加曽利E式）の土器片と黒曜石片が、採集されている。

現在、遺跡周辺は住宅地となっており、さらに畑をつぶしてマンションが建設されつつある。かつての遺跡の範囲を確認することは困難であるが、付近の小さな畑で土器小片がわずかに認められた。

遺物保管者 須藤徳子 土器 数片



5 平台古墳群

位置 岩字平台

岩漁港を北の眼下に望む平台の丘陵の先端一帯にあり、平台遺跡の存在する横浜国大附属実習施設の手前にあたる。かつては畑地の中に一〇基ほど存在したようだが、現在は一基も確認できない。丘陵全体が別荘および住宅地となり、古墳の位置確認や環境の観察も困難となっている。

一九三一（昭和六）年五月に土地所有者がその内の一基を発掘し、その年八月赤星直忠が記録のため調査した。五月の発掘での出土遺物には須恵器（長頸瓶・平瓶・坏）・土師器（坏）・金環・銀環・小玉・直刀・鎌・刀子などがあつたという。八月の調査の折の出土遺物には、須恵器（平瓶・埴・蓋坏）・直刀片・鉄鏃片・刀子・小玉がある。

石室はやや大きい河原石を積んだもので構築。高さ五〇釐、東西長二・四呎、南北長不明。床には頭大の河原石を敷き、天井には幅一呎、長さ一・五呎ほどの大石を

並べたものである。古墳の直径は不明。墳丘の高さは一・五呎ほどである。

遺物の大部分は岩小學校に保管されていたが、小學校の焼失により失われた。現存の遺物は土師器一点・須恵器（埴・平瓶各一点）・銅環一点・銅鏃六本である。

遺物保管者 真鶴町教育委員会 須恵器・土師器

松本敬 銅環

湯河原觀光會館 銅鏃

△平台古墳群出土の遺物 図版2▽

1 銅環

計測値…直径 一・七呎。高さ ○・八呎。

厚さ ○・四呎。

その他…銅板を数回折り曲げて一本の銅線を作り出している。

保存状況…錆はひどくないが、一部折れている。

2 土師器

器形…壺

計測値…口径 八・八呎。器高 一七・六呎。

底径 五・九呎。胴部最大径 一六・三呎。

成形…輪積み。口縁は粘土紐を内外面に貼付。

調整…外面

口縁 横へラミガキ。

頸部 縦へラミガキ。

頸部…胴部接合部 横へラミガキ。

胴部 下半部より頸部に向けて施された斜め縄文。

胴下半部 器面の荒れがひどい。

内面

口縁…頸部 横へラミガキ。

胴部 斜めへラケズリ。

胎土…砂粒多く若干の石英・長石粒を含む。

色調…淡黄褐色。

焼成…堅緻。

保存状況…口縁をほぼ半分欠くが、他の部位は完全で

ある。

3 須恵器

器形：平瓶

計測値：口径 六・二釐。器高 一三・四釐。

底径 八・三釐。胴部最大径 一七・〇釐。

成形：ロクロ

調整：外面

口縁 丁寧な横ナデ。

胴上半部 ヘラケズリの後、粗い横ナデ。

自然釉が全体にかかっているが、ナデの痕跡がわずかに認められる。

胴下半部 回転させながらのハケの後、底部より

胴部最大径の位置まで一度で回転ヘラケズリ。

内面

口縁 外面と一体の丁寧な横ナデ。

胴部 観察不可能。

胎土：砂粒・石英粒がやや多い。石英粒の中には四角

大のものもある。粒子は器面に若干浮き出ている。

色調：灰色。

焼成：堅緻。

保存状況：口縁から頸部の一部（四分の一）を欠く

が、他の部位は完全である。

4 須恵器

器形：短形壺（埴）

計測値：口径 八・五釐。器高 八・三釐。

底径 三・七釐。胴部最大径 一四・〇釐。

成形：巻き上げ（幅一・一・五釐）。

調整：外面

口縁：胴上半部 反時計回りの丁寧な横ナデ。

胴部最大径付近 回転ヘラケズリ痕を残す粗い横

ナデ。反時計回り。

胴下半部 時計回りの横ハケ（六本／一釐）の後、

回転ヘラケズリ。

内面

口縁、胴上半部 外面と一体の丁寧な横ナデ。

胴上半部以下 オサエ。

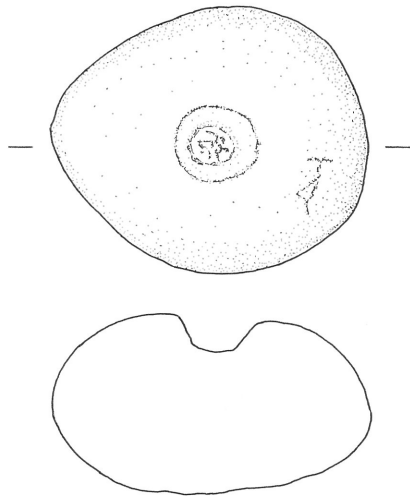
胎土：石英粒が器面に若干浮いている。

色調：胴下半には自然釉がかかり乳白色。

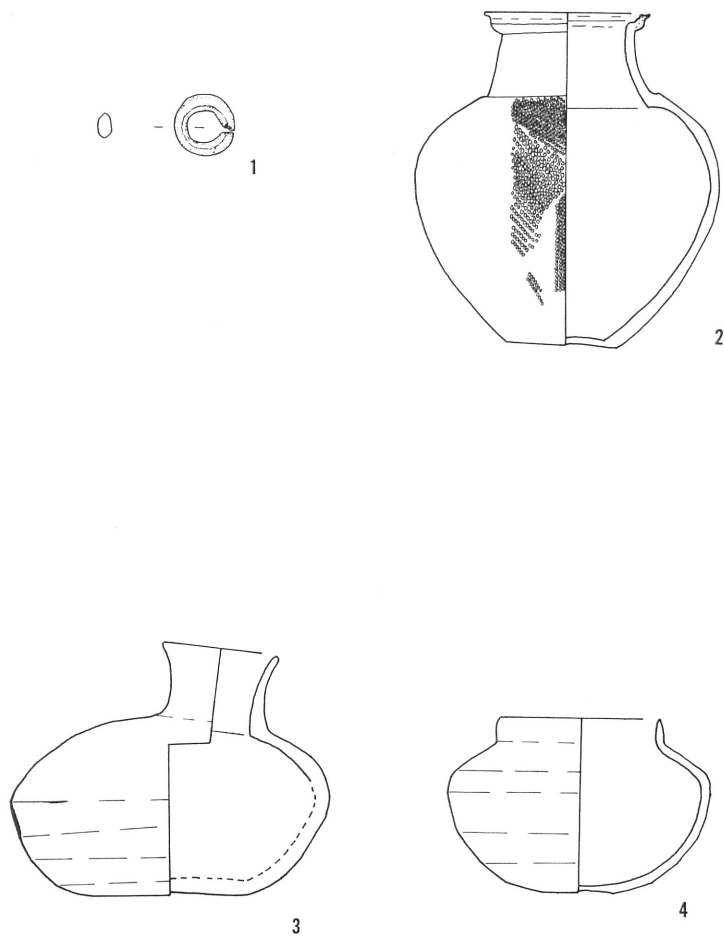
焼成：堅緻。

保存状況：口縁の一部（三分の一）を欠くが、他の部

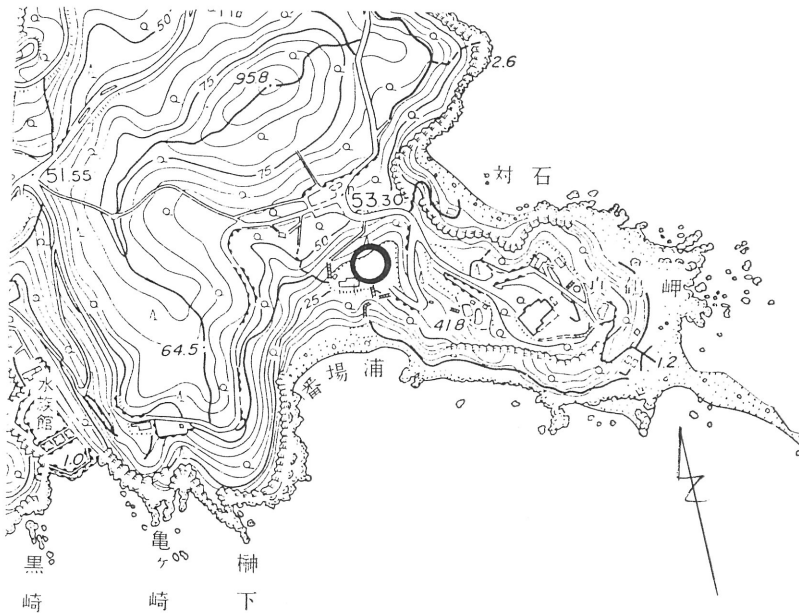
位は完全である。



図版 1 沢尻遺跡出土の石器



図版2 平台古墳群出土の遺物



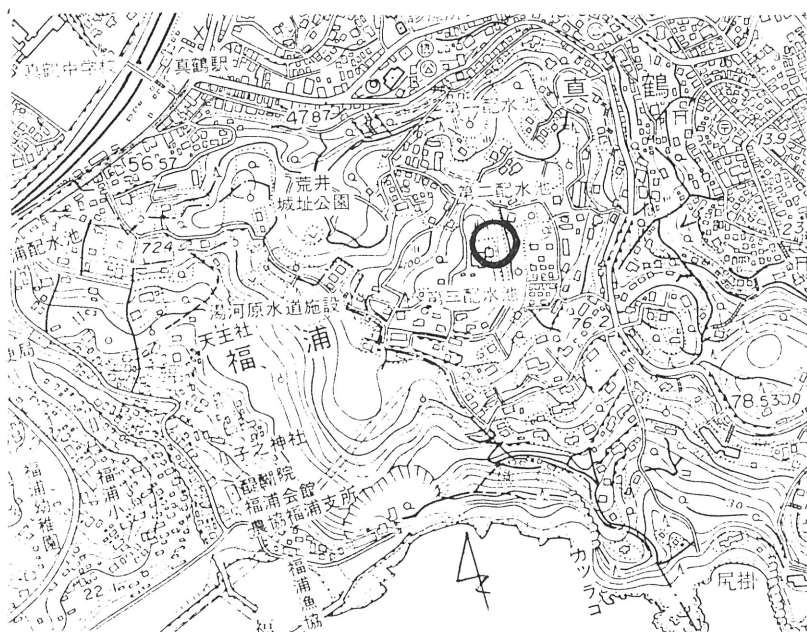
第二章 真鶴地区

6 番場浦遺跡

位置 真鶴字岬

真鶴半島先端部は、細くくびれた所から岬が相模湾に突き出て三ッ石に連なる地形をなす。一帯は照葉樹林の保存地域となっており、樹木がうっそうと生い茂っている。

遺跡は、くびれ部の番場浦に面した緩斜面に立地し、海拔三〇呎の高さにある。現在は削平されて岬見学者用のバス等の駐車場となっているが、削り取った崖面では小さな土器片を採集することができる。神奈川県史編さん時の調査では表土下約六〇釐から一呎の黒色土中から胎土に繊維混入の無文土器片や押型文土器片・敲石・磨石が採集されている。縄文時代早期の包含層である。



7 一戸堂遺跡

位置 真鶴字上一戸堂、下一戸堂

JR真鶴駅の南東約五〇〇㊦に一段高い小山がある（一戸堂山）。真鶴半島の付け根の位置にあたり高さは海拔一二〇㊦ほどである。遺跡はこの小山の頂上付近一帯に広がる。

この遺跡の存在は早くから知られており、地元の好学者の人々が折にふれて土器などを採集している。学会への資料報告の最初は、戦前の一九二八（昭和三）年発刊『日本石器時代遺物発見地名表』で、土器・磨製石斧・打製石斧などの採集遺跡とされている。ついで一九五〇（昭和二十五）年、金谷克己が『考古学雑誌』に「相模國真鶴発見の土偶」の題名で、人面把手と思われる土器片を報告している。また、一九六八年から一九七二年にかけて、杉山博久が当遺跡で採集保管されていた遺物の紹介をし、自ら実施した調査結果の報告をした。

従来は上一戸堂遺跡、下一戸堂遺跡など地点別に分けて遺跡名を使用してきた。しかし、当遺跡は神奈川県史

の示したように広範囲に遺物が分布し、行政上も複数の小字に及ぶため場所の確定に混乱が生じやすい。そこで当遺跡は遺跡群としてとらえ、その名称を釈迦堂遺跡とする。

遺物分布の濃い地点は、真鶴グランドホテルのある山頂付近、東斜面の森正利邸付近、県道からの急坂道を登った南斜面付近の三地点である。

A 地点（山頂付近）

ホテル建設にともない土器片・磨製石斧などの石器類が出土。時期は縄文時代早期の押型文、田戸下層、前期の十三菩提、中期の勝坂、加曽利E式である。

一九七一（昭和四十六）年の夏、ホテル東側の斜面を杉山博久が発掘調査。

東西（一・五[㍉]×二・六[㍉]）、南北（一・五[㍉]×一・四[㍉]）に走る各一条のトレンチを設定。東西方向のトレンチの東半分は急斜面のため表土の下はすぐローム層となり、東にゆくにつれ急傾斜となっている。山頂近

い西半分では表土の下に黄褐色土が存在し、土器片がわずかに採集された。

南北方向のトレンチは山頂付近に設定されたが、一か所で多少まとまった遺物が出土。この地点の土層は表土の下に火山灰の混じった土があり、その下に黄褐色土がある。遺物は三層から出土。遺物は勝坂、加曽利E式の土器片・磨製石斧・打製石斧である。遺構は検出されていない。

B 地点（真鶴一六二一番地、森正利邸地内）

従来、上釈迦堂遺跡と呼ばれた遺跡である。山頂から東へ数十[㍉]寄った地点で、高さは海拔九〇[㍉]ほどである。かつて、森勝利が温室を建設するために土地を削平したところ多くの土器・石器が出土。これを杉山博久が観察報告。

I層は耕作土、II層は黒色土、III層は黄色パミスを含む黒色土、IV層は黄褐色土で、遺物はIV層上面より出土。採集、保管されている土器は、縄文時代早期の

入海Ⅱ式、前期の諸磯C式、十三菩提式、中期の五領ガ台式、勝坂式、加曾利EⅡ・EⅢ式の各時期に比定される。また、石器類は磨製石斧・打製石斧・石錘・石鏃・磨石などがある。(図版4・5)

C地点(真鶴一六三〇番地付近)

従来、下釈迦堂遺跡と呼ばれた遺跡である。B地点よりさらに山を下った地点に位置する。真鶴駅より岬へ向かう県道真鶴半島公園線から分かれ、二〇㊦ほど急坂を登りきって、東に三〇㊦進むとB地点のある緩斜面になるが、遺跡はこの坂の途中の斜面や、登りきった緩斜面に立地する。現在は住宅地となっている。五領ガ台式、勝坂式の土器片が採集されている。

遺物保管者

真鶴グランドホテル

真鶴町教育委員会

平井敏正 川ノ邊昭治 森正利

△B地点出土の土器 図版 3▽

器形：深鉢

計測値：口径 三五・九㊦。器高 四一・二㊦。

胴部最大径 二九・五㊦。

成形：輪積み。

調整・施文：外面

口縁：頸部 二段にRLの縄文を施したあと、口縁部をナデて縄文を消している。その後、一条の沈線を弧状に配して文様帯を構成。区画内は正面から見て右方向よりヘラで刺突した刺突文で満たしている。また、弧状の文様の間にはヘラ描きによる渦巻文・懸垂文が描かれている。文様は一周につき一個の単位である。図示した一か所だけ懸垂文が施文されていない。

胴部 縄文の上を部分的にオサエ。施文時に押したようである。

内面 口縁より胴部下半までヨコナデ。

胎土：微細な金雲母・石英・長石を含む。

色調：口縁・胴部最大径 暗褐色。

胴部最大径以下 赤褐色。

焼成：良好。

保存状況：口縁部四分の一、底部二分の一を欠損して

いるが、他は完全。

△釈迦堂遺跡出土の石器 図版6・7▽

1 石鏃 玄武岩製（先端をわずかに欠く）

長さ 二・八釐。幅 一・二釐。厚さ 〇・三釐。

重さ 〇・九ㇰ。

2 石鏃 黒曜石製（先端左をわずかに欠く）

長さ 二・二釐。幅 一・六釐。厚さ 〇・三釐。

重さ 一・一ㇰ。

3 石鏃 黒曜石製（完形）

長さ 三・二釐。幅 〇・九釐。厚さ 〇・四釐。
重さ 〇・九ㇰ。

4 石鏃 黒曜石製（先端部は折れて欠損）

長さ 五・八釐。幅 二・五釐。厚さ 〇・八釐。

重さ 九・九ㇰ。

5 石鏃 黒曜石製（完形）

長さ 五・二釐。幅 二・〇釐。厚さ 〇・七釐。

重さ 六・一ㇰ。

6 石鏃 黒曜石製（完形）

長さ 三・八釐。幅 〇・九釐。厚さ 〇・六釐。

重さ 二・四ㇰ。

7 磨製石斧（二分の一欠損）

長さ 八・八釐。刃の幅 四・〇釐。

厚さ 三・二釐。重さ 二四五ㇰ。

8

短冊形打製石斧（完形）

長さ 一二・七釐。刃の幅 四・七釐。

基部の厚さ 一・三釐。刃部の厚さ 〇・三釐。

重さ 一〇五g

大きく剥離した剝片を両側より剥離して整形。

一方の面は自然面を大きく残し、数か所を剥離。

表裏面とも摩耗が激しい。

9

石皿（完形）

長径 四九・二釐。短径 三五・七釐。

厚さ 一四・一釐。凹部深さ 五・四釐。

周囲の小凹部 径 一・二釐。深さ 約〇・五釐。

裏面にも多数の小凹部あり。

10

石錘（完形）

長軸の長さ 六・八釐。扶入部の幅 五・七釐。

厚さ 一・七釐。重さ 一三〇g。

偏平な河原石の両端を表は二回、裏は一回の打撃を加え成形。剥離角度が急なため剥離痕に段差を生じている。

〈参考文献〉

金谷克己 「相模國眞鶴發見の土偶」

『考古学雑誌』三八卷三号所収）一九五〇年

杉山博久 「上釈迦堂出土の五領ケ台式土器」

『考古学ジャーナル』二六号所収）一九六八年

杉山博久 「神奈川県西南部地域における五領ケ台式土器」

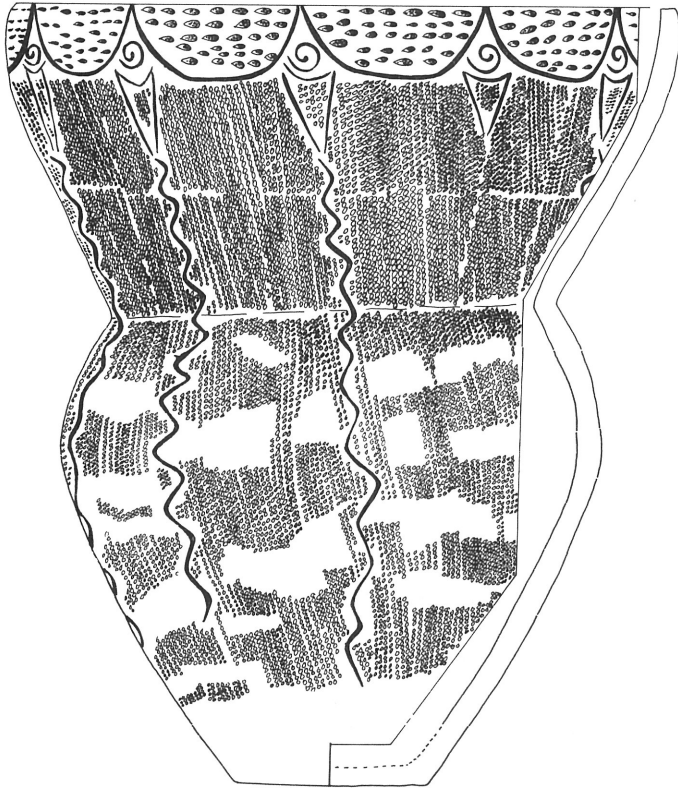
『平塚市文化財調査報告書』九号所収）一九七〇年

杉山博久 「神奈川県真鶴町釈迦堂遺跡とその出土遺物」

『考古学雑誌』五六卷四号所収）一九七一年

杉山博久 「釈迦堂山遺跡調査概報」

『真鶴』一〇号所収）一九七二年

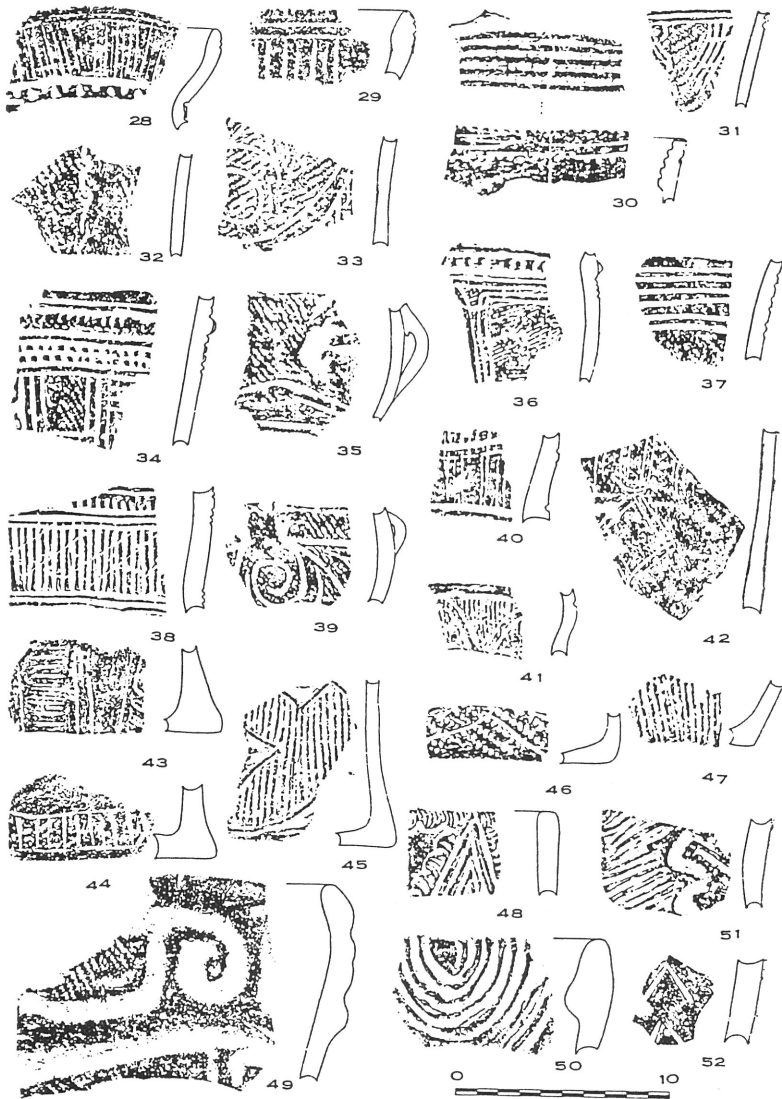


図版3 釈迦堂遺跡出土の土器



(単位 cm)

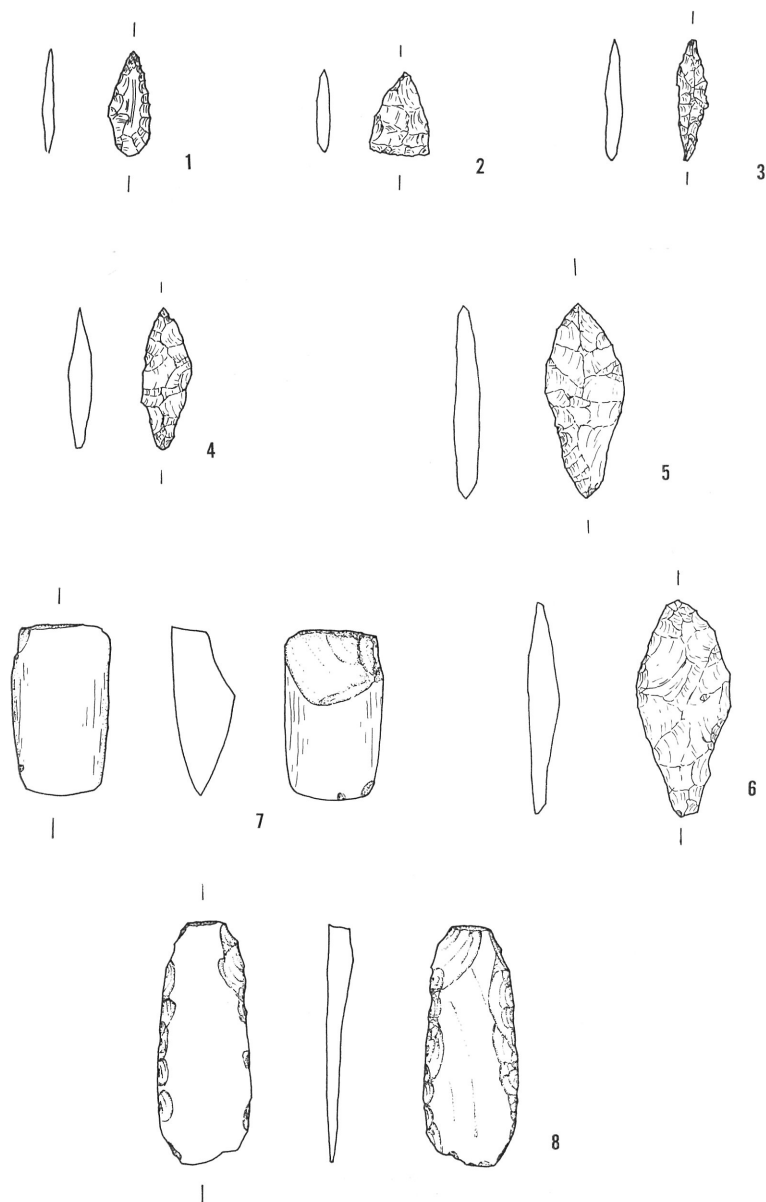
図版4 釈迦堂遺跡出土の土器拓影図(1)



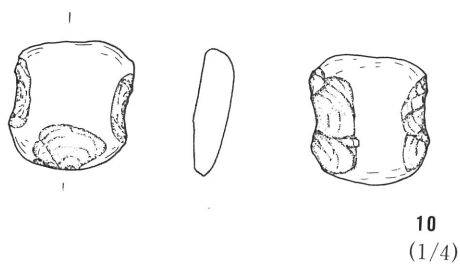
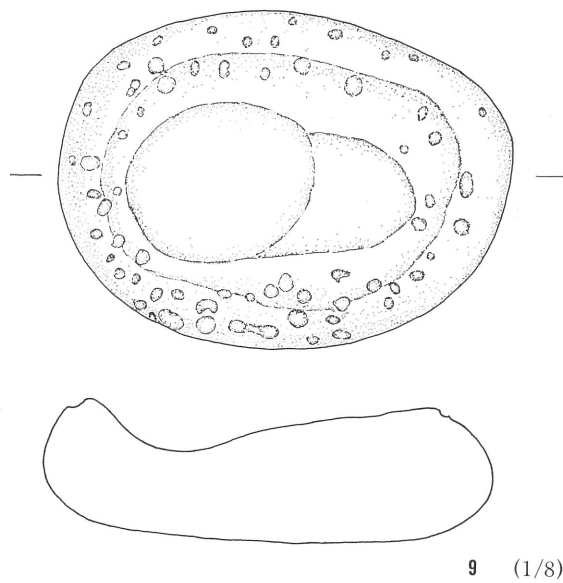
(単位 cm)

図版 5 釈迦堂遺跡出土の土器拓影図(2)

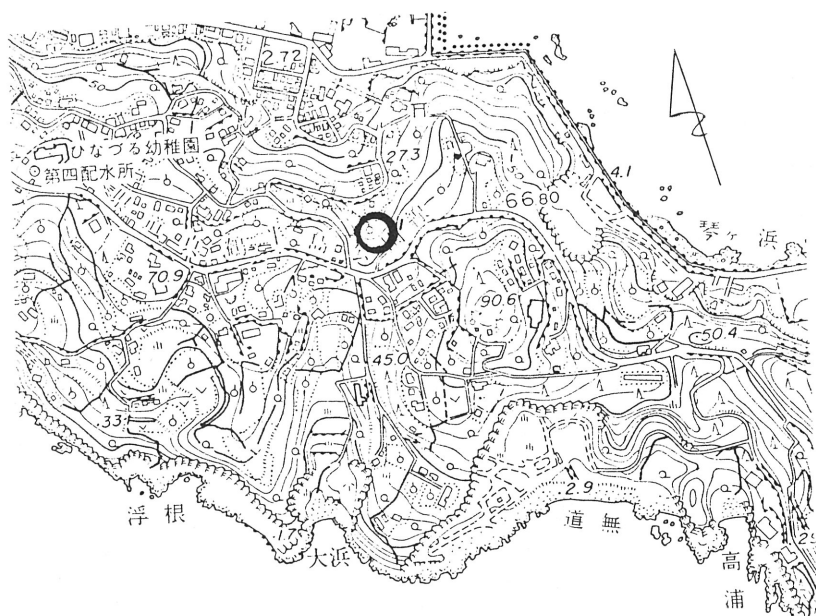
第2章 真鶴地区



図版 6 釈迦堂遺跡出土の石器(1)



図版7 釈迦堂遺跡出土の石器(2)



8 狐塚古墳群

位置 真鶴字狐塚

J R 真鶴駅から半島の尾根を岬に向かう県道真鶴半島公園線が通じているが、古墳群は大浜バス停付近の県道の北側に所在する。尾根の鞍部に北へ向かって小さな谷が延びているが、古墳はその谷の西向きの緩斜面に立地し、海拔約五〇～六〇㍎を測る。眼下には真鶴港が望まれる。

従来、古墳は二基まで確認されていたが、今回の調査で新たに未報告の古墳を同地で発見したので、これを三号墳とする。

一号墳

県道北わきのミカン畑内に存在する。県道より谷底を海に向かって下りてゆく小道があるが、古墳はその小道のすぐ脇に存在する。この古墳は戦時中の開墾により発見された。現在はミカン畑の土止め用の石積み、天井石と思われる板石が数個使用されており、その付

近に古墳があったことをうかがわせる。

石室は径八〇センチほどの河原石で積み上げ、さらに上に一層ほどの土が覆っていた。石棺は切り石で四周を囲み、天井、床も切り石を用いたものである。

棺内からは直刀・高台付坏（各一点）・長頸壺（二点）が出土したが、直刀は現存しない。

遺物保管者 谷平賢治

二号墳

県道北わきのミカン畑を二〇センチほど入った広い緩斜面に占地する。現在はずかに側壁、奥壁の一部が残存し、位置を明らかにするのみである。発見は一九五二（昭和二十七年）年ごろのミカン畑の拡張中である。

石室は長さ四層ほどで、一抱えほどの巨石を奥に立て、約一二〇センチの高さに河原石を積み上げたもので、天井には大きな偏平の一枚岩を数枚並べている。また、床には径一〇センチ内外の玉石を敷いている。出土遺物は長頸壺一点・坏三点があるが、坏二点が散失。

遺物保管者 横山和司

三号墳

二号墳から海側の緩斜面先端に占地する。二枚の畑の境にあたり、藪になっている。北側の畑より観察するに、偏平の切り石一枚、葺石つきいしと思われる河原石三〇〜四〇個が畑内に転落。土中には水平になった天井石らしい板石二枚、側壁らしい立石一枚が露出。未調査。

△一号墳出土の遺物 図版8▽

1 須恵器

器形：フラスコ型長頸壺

計測値：口径 九・四センチ。器高 一三・六センチ。

胴部最大径 一五・一センチ。

成形：頸部けいぶ ロクロ。

胴部 ロクロで壺の胴部を造り、開口部を粘

土板で蓋をして球形を造る。

接合部

開口部であった部位を胴部最大径の位置に球形の胴部を置き、上部に穴をうがち頸部と接合。

調整：外面

口縁 ロクロ水挽き痕。

頸部 ロクロ水挽き痕。沈線が三本施される。

胴部 成形時底部であった部位 回転ヘラケズリ。

成形時胴部であった部位 ロクロ水挽き痕。

内面

口縁～頸部 灰釉。

胴部以下 ロクロ水挽き痕。

胎土：微量の石英粒を含むが混雑物は少ない。

色調：灰色。口縁内部は施釉してあるが、外面は胴部

まで釉が存在するが部分的であり、自然釉と思われる。

焼成：堅緻。

保存状況：口縁三分の一、胴部三分の一を欠くが、他

は完形。

2 須恵器

器形：長頸壺

計測値：口径 九・六釐。器高 一九・二釐。

底径 七・三釐。胴部最大径 一四・〇釐。

成形：頸部 ロクロ。

胴部 ロクロ。

調整：外面

口縁 横ナデ。

頸部 横ナデ。

胴部 上半 自然釉。下半 回転ヘラケズリ。

高台部 横ナデ。

底部 回転ヘラケズリ。

内面

口縁 横ナデ。

頸部 絞り込みによる凹凸が残る。

胴部以下 観察不可能。

胎土…微量の小石、若干の石英粒を含む。

色調…灰色。釉は灰色の釉を主とするが、部分的には

緑色をなす。

焼成…堅緻。

保存状況…口縁を三分の一欠くが、他は完形。

3 須恵器

器形…坏

計測値…口径 一六・〇釐。器高 四・二釐。

調整…外面

体部 ロクロ水挽き痕。

底部 回転ヘラケズリの後、高台を貼付。高台接合

部は回転横ナデ。

内面 ロクロ水挽き痕。

胎土…微量の石英粒・砂粒を含むが混雑物は少ない。

色調…灰色。

焼成…普通。

保存状況…口縁四分の一を欠くが、他は完形。

△二号墳出土の遺物 図版8▽

4 須恵器

器形…坏

計測値…口径 一一・二釐。器高 四・〇釐。

底径 五・四釐。

成形…ロクロ。

調整…外面

口唇 横ナデ。

体部 ロクロ水挽きの後、胴下半から底部は器を逆

さにして回転ヘラケズリ。

内面

体部 ロクロ水挽き痕のままであるが、口唇部には

屈曲により沈線かと思われるほどの細い凹みが存在。

底部 成形時の指による引き出し痕の凹みを残す。

胎土…良く精選されている。微量の石英粒を含む。

色調…灰色。

焼成…堅緻。

保存状況…口縁を一薛ほど欠くが、ほぼ完形品である。

その他…底部にヘラによって「X」が書かれている。

5 須恵器

器形…フラスコ型長頸壺

計測値…口径 七・四薛。器高 一二・二薛。

胴部最大径 一四・五薛。

成形…半球形を二個、頸部をロクロで成形。半球形を

はり合わせた後、頸部以上を接合。

調整…外面

口縁 横ナデ。

頸部 ロクロ水挽き痕。

接合部 横ナデ。

胴部 回転ヘラケズリ。

内面

口縁 横ナデ。

頸部 ロクロ水挽き痕。

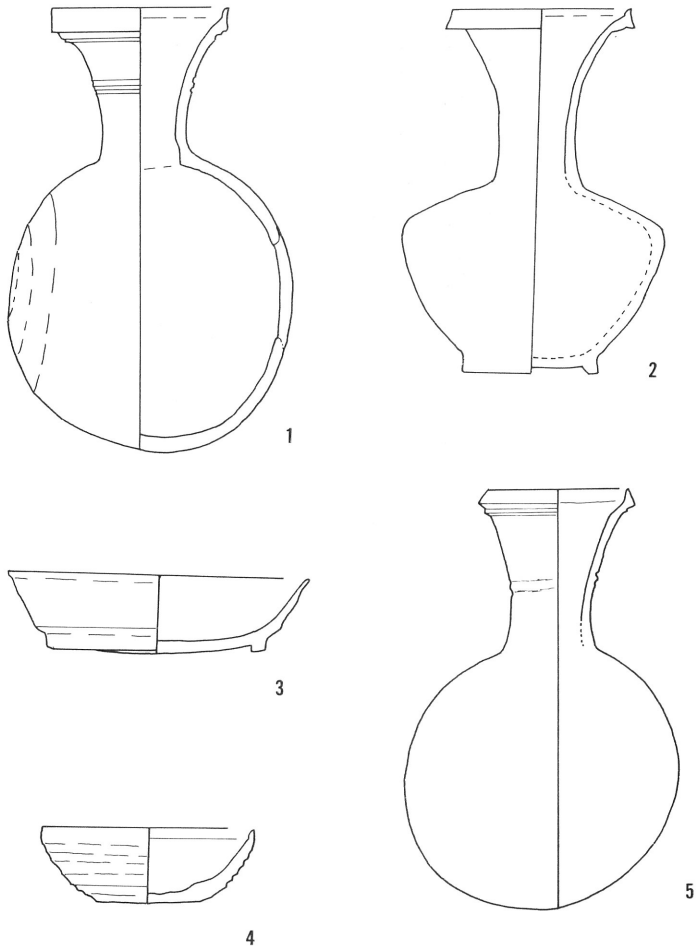
胴部以下 観察不可能。

胎土…石英粒が若干多く胴部に目立つ。

色調…灰色、上半部に自然釉がかかる。

焼成…堅緻。

保存状況…完形品。



図版 8 狐塚古墳群出土の土器



9 荒井城址

位置 真鶴字城の本

J R真鶴駅の南約二五〇呎に位置する。標高九〇〜一二〇呎ほどの丘陵の北東一角にあり、三方を丘陵に囲まれた窪地である。窪地は三〇呎四方の平坦地をなす。

同地は「城口」・「城の本」などの地名から、伝承される「荒井城址」と想定されてきた。一九八四（昭和五十九）年七月、公園整備にともない予備調査がなされた。

調査は幅一・五呎、長さ二〇呎のトレンチを南北方向に三条設定して行われた。各トレンチはI層の表土からVIII層の関東ローム層まで七層に分層される。

II層は暗褐色土、III層は多量の黒色スコリアを含む暗褐色土、IV層は黒褐色土、V層は黒色土、VI層は褐色土、VII層は明褐色土である。調査では遺構を検出できなかったが、III層より若干の自然礫とともに中国銭一点・土錘二点・陶磁器片が出土した。

採集された中国銭は「政和通宝」で宋代の徽宗政和元年（一一一年）に鑄造されたものである。土鍾は管状の形状である。陶磁器片はいずれも細片である。

△参考文献▽

杉山博久「神奈川県足柄下郡真鶴町真鶴一七八他における発掘調査概報」真鶴町教育委員会へ提出の報告 一九八四年